

復活節第4主日

第一朗読 使徒言行録 2・14、22-33
第二朗読 一ペトロ 1・17-21
福音朗読 ルカ 24・13-35

2026.4.26

カトリック高円寺教会 9:30
主任司祭 高木健次神父

今日の第1朗読では、ペトロが人々にイエス様のことを話して、そして最後に「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていたということが出てくるんですけども、「邪悪なこの時代」とは何を指しているのかと言え、ペトロたちが生きていた、ヘロデ王が支配している、あるいはローマ帝国が支配している、その特定の時代だけということではないと思われ。むしろ、聖書的な言い方をすれば、最初の人類が神様から離れて以来の、神様によって造られたにもかかわらずその造り主との関係を断ち切って、被造物の中だけで全てを考えていくっていう、神様と切り離された状態全体を表す、つまりはもう人類の歴史の中ずうっとがこの「邪悪な時代」なんだと、そう考えることができると思うんです。そこから神様との繋がりに戻りなさい、それが福音宣教だし、イエス様の呼びかけなんだろうと思います。

ただ、その神様との繋がりに戻るといのは、何かお祈りしたりというようなことだけではない。むしろわたしたちの日々の生き方に対する、あるいは日々経験する出来事についての考え方の中にまずは、神様との繋がりがあのか、あるいはないのかということが浮き彫りになってくると思うんです。

今日の福音では、「羊は羊飼いの声を聞き分ける」という言葉が出てきた。羊飼いの声にはついていくけれども、そうではない者の声にはついていかないんだってイエス様がおっしゃるわけですけども、わたしたちは実は本当の命へ導いてくれる羊飼いの声ではない声に従うという癖というか——ずうっとしていたので、実はそう簡単に羊飼いの声だけに従うということができないことに陥ってる。

それが神様との関係が切れている状態の影響というわけなんですけれども、たとえばわたしの個人的な、神様からの声なのか、あるいは神様からではない声——というのは神様から切り離された自分の中から湧いてくる思いの声ということが出来るわけなんですけども——同じ出来事についての考え方でも、全く違う結果になる。

わたしは、度々申し上げることですが、高円寺教会の主任としての役割と共に、主に平日は東京教区の外国の人たちの支援センター——カトリック東京国際センター——の担当司祭としてもう 10 年になるわけなんですけども、その中で、支援活動を通して、そこに携わらなかったらきっと出会うことがなかったであろう色々な人たちや、あるいは遠くの国から来た人——地理の授業の中だけで聞いたことがあるような国——アフリカとか——の人とも出会っているときに、とっても不思議だなと感じることがあります。

自分は冒険家のように世界中旅をして色々出かけていくっていう感じの性格ではない。どちらかというと外国に行かなくていいですっていうような性格、そのわたしがこうやっていろんな国の人と出会っているっていうのは神様の導きだし、自分の中にそれができる能力があるわけではないのにその役割が与えられているならば、まさにそれを助けていただくように神様にいつもその力をいただかなければならないなって思うときがある。反面、神から切り離された思いが湧いてくるならば、こういう役割に何の養成もなく任命されて、10 年間ほったらかしにされている。任命した人——司教様ですけど——はちょっと無責任なんではないのかなという、他の神父さんたちはそういうことずっとやってないのに不公平だっていう、そういう気持ちも湧いてくる。同じ出来事を前にして、全然違う感情というか気持ちになります。

神様からのものとして、神様を含めた形で出来事を解釈していこう、判断していこうとするならば、そこに自分自身の力が無さとかではなくて、神により頼み、そしてそれを通して与えられている不思議な現状と言いますか——決してそれが当たり前のことではないながらも、自分自身の世界が広げられているということに驚きを感じる。驚きと、そして謙遜、そして神様に助けを求めなければならないという思いが深まる。一方、神を抜きにして物事を考えるならば、他の人との比較や不満に至るということになるわけです。

これは 1 つの例ですけども、皆さんの中にも、神からの声、そして神から切り離された自分からの声ということが絶えず導いていこうとして響いているのではないかなと思います。神様のからの声、イエス様の呼びかけに従うならば、謙遜と、自分自身にこだわることではない希望へと。でも神から切り離された自分の思いに従うならば、比較と不満とそして自分あるいはさらには過去へのこだわりということの中に。そこには生きていくための力がない。

イエス様が「わたしが来たのは羊が命を受けるためである」っておっしゃるのは、決してご自分の仕事を手伝わせるためだけにわたしたちを呼んでいるのではない、そこに繋がるならば、わたしたちの中から思ってもみなかった力が湧いてくるし、そしてそれによって共に生きることができるようになる、その世界が広がるんだっていう呼びかけなんだと思います。

今日は「世界召命祈願の日」であります、「召命」とは職業の選択や人生の大きな選りということだけではなくて、日々の色々な出会う出来事や自分自身を神様との繋がりの中でもう一回見直し、そして、その繋がりの中で生きていくっていうことへの呼びかけだと思います。神から切り離された自分の思いの中だけに留まるのではなく神様との繋がりの中で生きるとは、第一には今自分の周りで起こっていること、自分自身についての考え方から出発すると思います。

でもそれは決して簡単なことではないわけです。そうではない声に聞き従っているっていう時間やその習慣が長かったわけですから。そして、自分の中から湧いてくる、神から切り離された声というのは、実は、一見合理的、そして自分の気持ちにじっくり合うというようなふうに見えるからなんです。

でもわたしたちは、ご自分をわたしたちに示さずにはおかないイエス様ご自身の一——わたしたちがイエスを見いだすという能力ではなく——イエス様ご自身がわたしたちに本当に必要なことを示してくださるんだという、神の力に信頼することを通して、一人ひとりがまさに被造物として切り離された状態ではなくて、造り主、命の源である方と繋がって、いただいた人生、そしてそれぞれの繋がりを生きていくことができる、そこに希望がまた湧いてくるんだと思います。

今日、「良い牧者の主日」とも言われますけども、「世界召命祈願の日」にあたって、それぞれ一人ひとりに呼びかけておられるイエス様にもっともっと出会っていきことができますように、心をイエス様に開く、その思いで、このごミサを通して互いに恵みを受けたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>